

歴史回廊

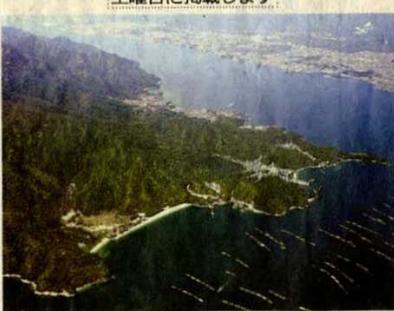
第9部・再考 敵島合戦⑤

天文二十三年(一五五四)年五月の防芸引分から約一年半、広島湾頭の各地で毛利・陶両軍による敵島合戦の前哨戦が続いた。毛利方は、敵島の宮之城をはじめ桜尾城に桂元澄、草津城に児玉就方、仁保島城(黄金山)に香川光景を置いて沿岸部の防備を固めた。陶軍の山間部からの進攻に備えて山里要害も築いた。

■海上から拠点攻撃

一連の戦いの担い手は、両軍の警固衆(水軍)であった。陶方の警固衆は周防大島の屋代島衆、陶方に付いた神領衆、白井氏などから構成されていた。とくに白井賢胤は府中周辺を本拠とする広島湾頭最大の警固衆で、毛利方の軍事拠点に海上から繰り返し攻撃を仕掛けた。

陶方の警固衆による敵島攻



土曜日に掲載します

警固衆の役割 攻防繰り返した水軍

撃は、天文二十三年六月五日から七度に及ぶが、敵島に上陸できたのは一度だけだった。弘治元(一五五五)年七月七日の白井賢胤による攻撃から九月二十一日の陶軍上陸までの二月余りの間は、警固衆の敵島攻撃の事実を史料では確認できない。

■戦力比較に先入観

一方、毛利方の警固衆の中心は、河内衆と呼ばれる太田川下流部の毛利氏直屬水軍と小早川隆景の配下の警固衆であった。「房頭實書」によれば、天文二十三年六月に小早川氏の警固衆二、三百艘が、陶氏の本拠地である周防国富田浦を長駆攻撃している。

河内衆も広島湾の海上や沿岸部で陶方の警固衆と戦い、宮之城に兵糧や物資を運んだ。とくに敵島合戦直前の九月二十八日には、陶軍の攻撃によって危機的な状況に陥っていた宮之城に援軍を送り込んだ。陶賢賢とともに敵島に渡海した大内氏の武将弘中隆兼は、一族らにあてた書状の中で、「毛利方の援軍の入城を許したのは、陶方の警固衆が不足していたから」と記している。

毛利、陶方の警固衆がせめぎ合った敵島(中央から左) 地先の海域

陶方と毛利方の警固衆の戦力比較すると、陶方が圧倒的に優勢で、宮之城の沖合はおびただしい数の陶方の警固船によって包囲されていたという「先入観」は、再検討の余地がありそうである。

(秋山伸隆・県立広島大教授)